

経営と健康

第7回

栄光と悲劇の偉人「西郷隆盛」

講談師 一龍斎貞花

西郷隆盛は、外国視察はしていないが、その名は外国でも知られている。

内村鑑三先生（キリスト教指導者）が、「日本を代表する五人」を英語で出版。

上杉鷹山、西郷隆盛、二宮尊徳、中江藤樹、日蓮聖人の五人。

アメリカのケネディ大統領が、就任記者会見で、日本人記者から

「大統領は、日本人で一番尊敬するのは誰ですか」の問いに、ケネディ大統領が、「上杉鷹山」と答えるや、日本人記者一人も鷹山を知らなかったと言われ、それ以降鷹山は多くの人に注目され二度ブームになった。鷹山を講談化した一回目、国会図書館へ資料調べに。二回目ブームの時改めて国会図書館に行くや、前回わずかだった鷹山本が多数。国会図書館もブームに併せて取り揃えることを知りました。

ケネディは、内村先生の本を読んで

いたんです。南方熊楠しかり、八田與

一も外国では知られているのに、日本で余り知られていない。日本人より日本

の歴史を知っている外国人がいるだけに、外国人客の多くなる今後、日本

の歴史、文化面の認識、教育も大切と思う。五人の男の中に西郷が選ばれ、

西郷は日本で超人気者なので心配ないが、中江藤樹、誰？ という人がかなり

りいるのではないかと心配だ。「朝敵徳川慶喜家臣 山岡鉄太郎大総督府へまかり通る、お通しあれ！」

勝海舟、高橋泥舟、（徳川慶喜に恭順を説き、終始慶喜を警護した槍の達人、妹英子は鉄舟の妻）と共に、幕末

の三舟と称せられる剣の達人で、三舟を過ぎたばかりながら禅の道を知る山

岡鉄舟は、ひしめく官軍の中、小田原を駆け抜け駿府へと。パパンパン

「ナニ、山岡が参った？ 勝さんの使者とあらば会わねばなるまい」

西郷に対面した山岡は、「慶喜はじめ、徳川は恭順謝罪の気持ちです。そして官軍の攻撃という噂に、

江戸の町じゅうが不穏な空気であります。何卒寛大なご処置を、お願い申し上げます」

西郷はただちに参謀会議を開き、七つの条件を決め、大総督有栖川宮熾仁親王の承認を得て、七カ条を示します。

有栖川宮は、十四代家茂に降嫁された和宮様の元婚約者。その人が幕府を攻める大総督になっておりました。

「七つの条件を出すから、勝さんに伝えてもらいたい

一、慶喜謹慎恭順のかどをもって備前

岡山へ預ける

二、江戸城を明け渡すこと

一、軍艦残らず引き渡すこと

一、武器一切を引き渡すこと

一、江戸城中の家来は、向島にて謹慎すること

一、慶喜の妄挙を助けた者の厳罰

二、幕臣でなお暴挙する者は、鎮圧する

この七カ条でござす

じつと聞いておりました山岡が、「慎んで承りました。但し、慶喜公を備前へ移すというご命令だけは、承服しかねます」

「朝廷のご命令でござすぞ」「されば西郷さんが、私の立場に立つた場合を考えて下さい。

薩摩の島津公が、もし誤って朝敵の汚名を受けたとしたら、先生は島津公

を差し出して安閑としておられますか」

「ウ、ウーム、解り申した。慶喜公のことは、この西郷がきつと引受けて取り計らいますよ」

西郷の腹心で人斬り半次郎と異名のある桐野利秋が

「相当に無礼な男ですな、あの山岡は」「いや、流石勝さんのよこす男だ、胆がすわつちよる。もし慶喜を備前に預けると言い張ったなら、あ奴はおいどんを殺すつもりだったろう。ウワツハハハ……」

初代家康の居城であった駿府城下で行われ、また最後の將軍慶喜が処分決定後、この駿府で三十年間を過ごすのも歴史のいたずらか、因縁でありましょうか。この会見は駿府城に近い松崎屋源兵衛宅にて行われ、明治百年の年に記念碑が建てられました。

今年(明治百五十年)に当り、そこで西郷を大河ドラマの主人公に選んだのでしょうか。維新は、工業力、文明開化の進歩は大きなものがありました。逆に言えば、江戸の良かったことが無くなって百五十年とも言えましょう。

西郷と勝の会見

「才よくぞご無事で、ご苦労でした」海舟は、信頼していたものの、山岡の顔を見ると流石にほっとした。

江戸城にて、官軍の条件について会議が開かれたが、相変わらずまとまりません。

「海舟は、幕府の重役でありながら、敵に徳川を売る憎い奴」

と、憎悪を募らせる者もいる有様。慶喜は、寛永寺大慈院に入って謹慎しているの、会議には不参加。

「もう三月も十日を過ぎ、総攻撃の日が目前に迫り、官軍はすでに品川まで来て総攻撃に備え陣を敷いている。山岡が話をまとめたとはいえ、俺が西郷と会うより仕方がなからう」

海舟は固い決意を胸に、慶応四年三月十三日、山岡一人を連れて芝三田の薩摩屋敷へと乗り込んだ。パンパン

死を覚悟の会見、さぞ堂々と乗り込んだかと申しますと、普段着に細身の大小をさりげなく差し、そこいらをブ

ラリと歩いてこようといった様子で、嚴重な薩摩屋敷へと乗り込んだのでした。

薩摩屋敷玄関正面には打水がなされ、幕府の使者を迎え入れるたすまいを整えておりました。

奥へ通され待つことしばし、ブカブカの軍服を着た大男の西郷吉之助が、

「遅くなり申した。勝さん、心配かけて申し訳なか。官軍も寄り合い世帯で中々おいどんの思うようになり申せん」

「西郷さん、貴方が総大将で来るといふので私は安心していましたよ。

貴方なら、江戸百万市民を泣かせるようなことはしないと、思っていましたから」

「おいどんも、ここまで軍を進めて来たが、これ以上どうしようか、あなたと相談しなくちゃあ、おいどんの一存ではいかんによって、こげんところへ

お呼び申したのでござす」

西郷と勝の二人は、立場こそ敵味方に別れてはいるものの、日本の国を思う心に変わりはありません。

とことん戦ったなら、両方の後押しをしているフランス、イギリスがこれ幸いと、日本を植民地にしないと制限らない。そうなったら日本人同士戦っているところではない。アメリカは西南戦争が終わり使い古した兵器を日本に売り込んでいます。

ガトリング砲という二門の機関銃を購入したのが、長岡の河合継之助。

江戸開城について、国を思う二人の会談はまだまだ続きます。大奥には朝廷出身の和宮と、薩摩出身の天璋院の存在が。江戸っ子勝の心意気、次号のお楽しみに。パパンパン

